

俳人 成田千空研究会

千空研究

第10号

大根やどうともせよと横たはる

—千空句版画—

藤田 健次

千空さんは長い間、青森県文芸協会の理事長をつとめた。当時理事だった私は、時々理事会に出席したわけだが、その理事会のなごやかだったこと。それは、千空さんのお人柄によるものだったと今思う。千空さんは、暖かくておおらかで、この句のように、どうともせよと大きく構えて、いつも私たちをまとめてくれた。私の残りも少ない。その時は、私のことだ、きっとじたばたしてみんなを困らせる。「大根」にはほど遠い。第5句集『忘年』から。

(版画家・会員／八戸市)



目次

大根やどうともせよと横たはる

—千空句版画—

藤田 健次

1

県近代文学館川柳大会の属目吟

千空さんの背広

野沢 省悟

2

「天声人語」に千空句引用

齋藤 美穂

2

「今日を断ちわたしの前にあるレモン」について

齋藤 美穂

3

千空資料研究②

「昭和四十四年日記」より〈上〉西谷ともえ

4

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⁽⁹⁾

五所川原俳句会の設立と隆盛 齋藤 美穂

6

〈千空点描〉草田男短冊は千空の書

6

〈作品鑑賞を読む〉⁽⁹⁾

暮れがたく暮れゆく野づら桜桃忌 友岡子郷

9

〈成田千空資料再録〉⁽¹⁰⁾

『萬緑』師・中村草田男の千空句評⁽³⁾

10

寺山修司を詠んだ千空句

11

寺山修司と成田千空

12

陸奥野辺地社中芭蕉二百回忌追善興行

16

翻刻・解説 舘田 勝弘

20

会員名簿・北極星

千空研究会の事業

① 詳細な年譜の作成

② 千空俳句データベースの作成

③ 関係資料の収集

④ 関係者からの聞き取り

⑤ 会報『千空研究』の発行

⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

千空さんの背広

野 沢 省 悟

本年3月5日、県近代文学館において「第15回青森県近代文学館川柳大会」が行われた。当日、県内外の川柳人102名が集まり大盛況であった。

この時期、文学館では何らかの展示会があるのだが、川柳大会の参加者が大会に来てその展示会をほとんど見ないで帰ってしまっていた。そのことを文学館の職員がぼつりとつぶやいたのが僕には気になった。そこで数回前から大会の席題を、その展示会の中のものとするにしたい。

いわゆる属目吟である（川柳界では印象吟とも言う）。このことによって川柳大会参加者は句をつくるために必ず展示会を見ることになった。

今年は「青森県俳句懇話会寄贈資料展」であった。その展示されてあるものから何を席題にするかは、僕が決めることになっている。大会4、5日前に展示物を眺めて決めたのが、「千空さんの背広」であった。千空さんのグレーの背広の色紙などとともに展示されてあった。

大会当日、「成田千空の背広」として席題を提出。さて、川柳人がどのように千空さんの背広を詠んだのか紹介したい。選者は2名。徳田ひろ子氏、若くから川柳を始めていて現在は岩手県在住の女性柳人。稲見則彦氏は高校教諭を退職された弘前在住の柳人である。

徳田ひろ子特選

わしや昔モボと呼ばれておったんじや

稲見則彦

千空さんの時代よりちょっと前の時代の言葉「モボ」、千空さんからはほど遠い風景に見えるのだが、作者は背広から華やいだものを感じたかも知れない。風土の作家と言われた千空さんであるが、その意識は常に真実や普遍に向っていたはずで、そこに同時に新しさがあったように思われる。その点を作者も選者も感じたのではないだろうか。

稲見則彦特選

青空の広さを語るボタン穴 成田我楽
千空さんのイメージをうまく掬い上げた一句である。ボタン穴から青空を見たのは川柳人の眼である。作者は弘前在住。この句から推察するならば、おそらく千空さんの俳句に触れていると僕は思う。

次に秀句（各3句）を紹介する。

徳田ひろ子選

あの世への待ち合い室の人だから 福田文音

マリアカラスとハグしたことのある背広 むさし

稲見則彦選

何度濡れただろう終電の雨に 菊池 京

背広から風の藻屑が落ちてきた 千島鉄男

父ちゃんがこっそり来てた参観日 菊池 京

これら秀句を読むと川柳人の発想の広がりを楽しんでもらえると思う。

最後に入選句の中から10句紹介する。

ポケットの中に飴玉五七五 村井規子

面影が腕のかたちで浮いている 藤田めぐみ

ポケットからはみだす大きな句を詠もう

背広着てヒトの形に戻ろうか 沢田百合子

花鳥風月背広に溶けている景色 月波予生

どっさりと背広が届く形見分 野口一滴

春夏秋冬田んぼ見つめてきた背広 袴田よし司

ため息ではありません深呼吸だ 田沢恒坊

ぬっと出てぬっと消えゆく千空師 吉田吹喜

吊された背広のなかの小宇宙 今泉敏雄

（現代川柳雑誌『触光』主宰・会員／青森市）

「天声人語」に千空句引用

朝日新聞3月20日付「天声人語」に、千空句が引用された。

裏山にゑくぼの日ざし福寿草

北アルプスをおおぐ小高い丘を福寿草の黄色が鮮やかに染めあげる。長野県松本市の四賀地区は信州でも指折りの福寿草の群生地である。きのうも約250人の客でにぎわった……と恒例の福寿草まつりの様子を紹介したコラム。

「今日を断ちわたしの前に あるレモン」について

齋藤 美穂

半世紀の時を経て

この色紙は、昨年一〇月に五所川原の俳人・増田木亘子^{たもくかんし}宅の蔵で見つけました。色紙の主体は木亘子の筆による果物の静物画で、「四媚^{がらぎ}我着^{わし}」の落款が押されています。そこに「今日を断ちわたしの前にあるレモン 千空」という字句が配置され、こちらは字の特徴から千空さんの筆によるものと思われまふ。二人の交流の深さが窺える色紙ですが、千空さんの俳句であるとすれば珍しい雰囲気の前句だというのが第一印象でした。



増田尚紀さん提供

戦後まもなく自由律俳句誌「山河」創刊に参加していた木亘子は、昭和三年に五所川原俳句会に拠り俳句を再開します。木亘子は津軽の風土病であるシビ・ガッチャギの研究により第二回東奥賞、日本ビタミ学会賞を受賞、また五所川原の増田病院院長として人々に慕われた医師でした。医業の傍ら街の文化振興にも尽力し、五所川原俳句会の意欲的な活動を多方面から支えた俳人の一人です。早くから伊藤正規画伯らと洋画会を設立するなど絵画にも造詣があり、ご自宅には作品が残されていますが、千空さんとの合作と考えられるこの色紙の存在は知られていませんでした。

早速この俳句について調べてみると、五所川原俳句会の記録稿、青森俳句会『暖鳥』（昭和三五年二月）、『青森県俳句選集』（昭和三七年四月）に掲載されていることがわかりました。また、「わたし」という語句を使った句は、千空俳句の中で唯一であることも判明しました。

前衛俳句運動と千空俳句

昭和三〇年代中頃から前衛俳句と伝統俳句との論争が巻き起こり、全俳壇を揺るがす事態に発展していました。現代俳句のあり方を巡り金子兜太らの猛烈な批判にさらされた師・草田男が俳壇と距離を置くようになったのと時を同じくして、千空さんも『暖鳥』『萬緑』での作品発表が途絶えるようになります。千空さんの寡作は県俳壇を寂しがらせましたが、千空さんは伝統俳句のゆく道を模索し、ひたすら句作に打ち込んでいたのです。昭和三四年、京都で開催された萬緑全国大会において、「前衛俳句について」と題して講演した千空さんは、俳句の前衛運動を否定する立場をとらず

「季題の本意を変革するのが俳句作家の新しい詩精神である」と現代の俳句の方向性を唱えました。

昭和三六年『暖鳥』誌上で相馬正二は、

千空の「今日を断ちわたしの前にあるレモン」は、われ／＼伝統俳句のこれからの行き方を示唆していると思う……「一つの石を石としてうたい、石を石たらしめている条件をうたい、石の変貌をうたい、雨をうたい、風をうたい、夢を詩うことによって、石の存在を見事に凝集したような作品をいつか必ず創りたい」とは修羅おとしの成田千空の言であるが、われ／＼もわれ／＼の俳句を愛する故に、確固たる信念を持って進んで行こうではないか。

と結んでいます。

また、全県的な俳句グループ「森の会」で共に活動していた十和田市の米田一穂は、この頃の千空さんの俳句活動について、

千空は万緑に投句しないと云つても生粋の万緑人である。万緑はデッサンを重視する。千空はあくまでも写実を重んじ、けつして頭に浮んだ観念を俳句にする男でない。その千空が「否定」や「批判」の精神でなしに新しい境地へ入って行くべく、「或る時は暗喩の手法を用い、或る時は独特の鋭い感性によつて試作しているのである。千空のほんとうの詩はまだその過程にあると思う。しかし、千空の句はその対象が完全にとけこんで句いとして発散している。……千空の俳句は「抽象」「造型」にあてはまるものではない。真の伝統俳句であると思う。『暖鳥』昭和三六年八月号「抽象俳句と伝統」と述べています。

季題には季題の情趣という垢がこびりついてい

る。しかしそれは季題の実態と何の関係もない。季題は環境と共に推移するし、それ自体時々刻々に生滅するゆえ、既成の情趣と馴れ合うことを許さなはずなのである。新しい本意の発見が永遠に、そして常に可能だと考える。……私の季題体験はリアルだけでなしに、イメージを豊かにする母胎なのである。このいのちある実体が、散文的な感情や意識を、十七音と共に凝集する一要素となつてゐることは確か。『暖鳥』昭和三十六年九月号「基本の展開」成田千空）

千空さんの主張は注目されていました。「今日を断ちわたしの前にあるレモン」はそれに応える実作であり、「伝統俳句の継承を強く意識し、推し進めようとする」千空の熱意と決心が反映された作品だったのです。

後日談

この俳句について千空夫人に伺うと、
「初めて見ましたが、まるで詩のような俳句ですね。今日の喜びに区切りをつけ、また目前の現実に向き合い、精進していこう——というような意味でしょうか。大きな賞を受賞しても謙虚で、自分に厳しかった千空の姿そのもので、生の千空に会ったような気がします。」

と嬉しそうに話されました。私は改めて千空さんの俳句の魅力を知らされました。

それにしてもこの色紙、千空さんと木豆子さんはどのような会話をしながら合作したのでしょう。思いがけずに蔵から出てきたこの色紙は高齢者施設に飾られ、暗い廊下を明るくしているということです。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

千空資料研究②

「昭和四十四年日記」より（上）

西谷 ともえ

千空さんの甥で成田家本家の黒柱、当会の会員でもある成田奉生^{ともなり}さんが三月二日お亡くなりになった。行年七十四歳という。穏やかな遺影が千空さんとそっくりで驚いた。奉生という名は千空さんがつけた。生前奉生さんから伺った。戦中の千空さんの思いがこめられた名だ。昭和十九年、軍国少年だった千空さんは病で帰郷していたがこのころには徐々に良くなっており、「月刊東奥」に俳句や方言詩を投稿していたころだ。実家で世話になっていたころその家に生まれたのが奉生さん。戦争が激しさを増す中産まれた赤子に、戦争に行けなかった千空さんが思いを込めて付けた名前である。

青森県近代文学館では平成二十六年度の「成田千空」展開催にあたり、奉生さん所有の資料を多数借用し展示させていただいた。また市子夫人の代理人として五所川原の千空宅資料の調査に協力いただいたり、市子夫人、奉生さん所有の資料をまとめて当館へ寄託していただいたりと大変お世話になった。この場を借りて謹んでお悔やみ申し上げます。

千空さんは晩年までずっと日記をつけていた。文学館では市子夫人の寄贈により昭和二十年のものをはじめ十冊を所蔵しているが、これとは別に

保管されていたもの十冊が奉生さんにより寄託となっている。今回は奉生さんが文学館に寄託されている資料から「昭和四十四年日記」を紹介する。

「禪1969」と印刷された15×11センチ縦長、縦開き、横書きの日記帳である。宗教法人黄檗山緑樹院の潮音精舎出版部の発行である。黄檗^{おうぼく}宗の総本山である。黄檗宗は日本三大禪宗の一つ（他は臨済宗、曹洞宗）である。千空さんは日記をその時手元にあったノートに書くことも多いように思えるので特別選んで使用したのではないかもしれないが、黄檗宗のお寺は青森県内には現在三つ、黒石に二つ、五戸に一つあるのみであり、なかなか手に入らないものだと思う。誰かからもらったということも考えられる。太宰の墓のある東京三鷹の禅林寺も黄檗宗のお寺であることも何か関係しているかもしれない。

こんな日記帳からいくつか抜き出してみる。番号と（略）は引用者。

①1月1日 水曜日 天気 雪 寒暖 風強し
予定 年賀状書き

松島厳松寺の除夜の鐘をテレビで聴く。12時、元町の八幡様へ雪を踏んで詣でる。人影少なし。岩木川の風が身にしみる。

今年は五朗亡く、喪ごころが晴れない。アイサツ廻りすべて欠礼。（中略）店11時—18時

②1月4日 土曜日 天気 雪 寒暖 風寒し
今年から元町の住宅と新町の店と両方の雪を片付けねばならず、相当な労働であるがさほどつらい気がしない。（後略）

③ 1月9日 木曜日 天気 雪 寒暖 寒し

暖鳥集選5句。評書けず。句評など、この頃空しさを覚えるばかり。東京大学の紛争、流血の惨状の行動で壊れる東大なら壊れるがいい。壊れたあとにどういふ大学が生まれるかその方に期待したい。

④ 1月17日 金曜日 天気 晴 寒暖 暖

東大紛争はついに政治的闘争となり、機動隊が大学へ突入する構えである。

わが家では内部の水道のバルブが連日の寒気で痛み、水が噴出。水道屋に来て貰う。2メートルも積った庭先の雪を掘って外部の水道バルブを止め、一時断水させる。家一軒の管理も大変なものだと思う。

⑤ 1月21日 火曜日 天気 曇 寒暖 寒波

青森から電話あり。25日に豊島へ奉生の結婚の結納立てにゆくから、同行してほしいという。

⑥ 2月13日 木曜日 天気 晴

元町の我が家が空き巣ねらいに侵入される。日中は誰もいないので、日中の出来ごとであろう。夜市子が家へ帰ってびっくり。賊は便所の窓から入り、書斎と茶の間を荒している。警察官舎の鎌田さんに連絡。4人の警官が来て、指紋採集。金は一銭もおいていないので、被害はない。ノラ猫に入られたようなものである。

⑦ 2月17日 月曜日 天気 晴 寒暖 寒し

(前略) 旧正元日町内の八幡様へお参りにゆく。人影なし。岩木川がとうとうと流れている。岩木

山は真白に全貌をあらわしている。新春とこのことだと思ふ。

⑧ 3月7日 金曜日 天気 晴 寒暖 暖

句作。「樹頭の花」投句。

金子兜太の句集「蛭蛭」と中村草田男の句集「美田」を読み返す。やっぱり草田男と兜太が面白い。読むたびに面白いところが目につく。未完なのだろう。二人とも。完成した作品など、どこかに嘘があるだろう。真の詩に完成はないだろう。コンチキショウ。と思う。

① 年が明け、日記の一枚目に「五朗亡く……」と岩木川からの寒風吹き付ける寂しい心情をあらわにしている。平山五朗は昭和四十三年九月九日脳溢血で亡くなった。四十三歳であった。昭和二十五年五所川原俳句会結成時からの会員で、「暖鳥」「萬緑」の仲間であった。五歳も年下で、乳飲み子を抱えていた仲間、五朗の死は千空さんに堪えたことであつただろう。この年、『平山五朗句集』を編み、出版へとこぎつける。日記によると十一月一日に納品され、すぐにともに編集した前田水馬に一冊届け、十一月三日第九回五所川原俳句大会と一緒に出版記念会を開催している。

②④⑥ 前年、元町に新居を構えた千空さん。嬉しさと、それに伴う思いがけない苦労が垣間見える。空き巣が入ったのに、「ノラ猫に入られたようなもの」というのも千空さんらしいおおかさを感ずる。後の日記によると当然のことながら市子夫人は大変怖がり、しばらく千空さんの方が早く店を出て自宅に帰っていたようである。水道も一度の修理で間に合わず、一日一度は見

廻りすることになっている。

③④ 一月十八日から十九日にかけての東大安田講堂攻防戦は日本中の注目を浴びた事件だが、千空さんもその前後、報道にくぎ付けだったようだ。十八日の日記には「まさに戦争」と書いている。

⑤ 青森の作家から奉生さんの結納に同行を求められる。二十三日には中里町豊島へ結納立てに行く。お相手の百合子さんを「シンの強そうな人で、笑顔がいい感じ」と書いている。四月二日挙式、「80歳の母をはじめ、皆、生きている顔、顔、顔。」と喜びを露にしている。

⑦ 俳人の目を感じる日の日記。

⑧ 千空さんは古くから草田男はもちろん、金子兜太にも注目していた。蛇笏賞受賞のパーティーでのスピーチで「草田男に最も近いのは兜太さんであろう。何が近いかというと、二人とも未完成の作家だ」と言ったという(前号で紹介したスピーチより「青嶺」通巻第百八十号より引用)。千空の本意は「二人は未完成のエネルギーを持って」おり、そこが「類似点である」という。このことは昭和四十四年にはすでに考えていたことであつたのだ。

(県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長・会員／青森市)

青森文芸ブックレット(定価は税込み)

中村草田男訪問記 成田千空 500円

千空句帖(戦時下の手作り句集) 1080円

発行 青森文芸出版

—永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(9)—

五所川原俳句会の設立と隆盛

齋藤 美穂

日記のない一五年間

今回は昭和二六年から約一五年間にわたる五所川原俳句会初期の活動に注目していきます。これまでは残された日記資料を調査することで千空さんの具体的な行動や内面に触れることができませんでした。しかし、千空さんの日記は故意に抜かれている部分や時代があります。日記が存在しない時代は、それはそれで何かを伝えているのかもしれない。

例えば、昭和二五年で一度途切れた日記資料が再開する四三年には「俳句作家として成るも成らぬもこれからの一〇年にかかっている」と記され、それまでの一五年間が千空さんにとってひとつの時代であったと見るができます。

戦後の復興から経済の成長期へと発展めざしい五所川原に古本屋を開き、妻を迎え、さあこれからという時でしたが、千空さんが浮き足立つことはありませんでした。俳人・成田千空がこの一五年間に成した仕事は、地域の俳句会から始まり、ジャンルを超えた地域文化の向上へと及びますが、長い時間をかけて結実した文芸活動の意義、人々のつながりは私たちの目に触れることはありません。三〇歳から四五歳という充実した年代、日記帳に向かって一日を振り返るまでもなく、ただ一

点の初心をもって邁進した一五年間であったのかもしれません。

考え、創り、生きつづけ、一日、一日、新鮮たるべし。生きながらえて大樹たるべし。もとはオレという人間唯一つしかない。うんと頭を使い、人間、社会、自然と心を開いて交わるべし。一句のために全身を労すべし。その集積を希うべし。(昭和四三年 日記より)

人間・願望をもつ小鴨

生涯を一貫する初心は、その後の全ての言動の根拠であり、千空さんが「俳句」を必要とする理由もそこにあります。ここで、昭和二八年に発表された「小鴨の願望」という随筆をご紹介します。ここには「N君」「僕」「小鴨」という複数の千空さんが登場します。

N君は若い真面目な農俳人である。がばがばした感じの清潔なズボンに、折り返しのないきちっとした襟の白シャツを着て自転車で来る。僕のところに立ち寄るのは大い夕方方決つてゐる。

若いN君に自分と同じ轍を踏ませないように、年上の僕はこう打ち明けます。

判つきり言へば、第二次大戦中僕は人間でなかったといふことに関する自覚の痛さは多分死ぬまで忘れられないだらう。繰り言めくが、僕は戦争中の日記を大事に保存してゐる。ときをりこれを読むと、僕はわあッと叫んで一枚裂き二枚裂きそれが度重つて大分薄くなつたが、それでも大事に保存してゐる。僕の言ふ人間とは、言ふまでもなく、飯を喰つて生きてる限り人間ではないかといふ人間のことでなく、りんと

【千空点描】

草田男短冊は千空筆の書

成田書店の奥、千空さんの椅子の後ろに短冊が掛けられていた。

掌篇的な店へ繪慕ひ夏の蝶

中村草田男が訪れたとき書いたもので、句集『銀河依然』には、「成田千空居にて」とある。

書店には無造作に何点かの絵が掛けられている。絵心のあった千空さんの友人の作。そこへ蝶が舞い込んだ情景を詠んでいる。

ある日突然、新しくなっていた。「おや」と言うと、「煤けて見えなくなったから、我々書いたんだ」とのこと。

昭和26年からだと半世紀も掛けられたまま。そのうちに千空筆も黒ずんできて、見た人は草田男の書いたものと思っていたようだ。

〈佐〉

存在する人間のことである。僕は僕の過去に於ける非人間的行為の記憶を喪失しない限り、人間願望を止すわけにはゆかないだらう。(この小鴨は只今俳句といふものに意力を注ぐことに依つて僅かに人間の在りかを掴まうと力めている)「俳句」といふちつぽけなものでどうなるかなどと自他共に軽視しない方がいゝ。成る程僕は弱い。然し、僕は人間的を放棄してまで強くなる必要はみとめないのです、どうしてもこ

の線だけは崩さず、僕らなりの生き方をし、作品をつくり、これを持ち寄る場としての集団を保持し、仕事を積み重ねてゆくしかない。手つとりばやく言へば、まづ人間の存在を如実に示し得る作品をつくることを自分に課そう。

〔小鴨の願望〕成田千空『暖鳥』昭和二八年九月号〕

聞き役の若いN君を相手に、僕の重大な決意が語られてこの随筆は終わっています。



『暖鳥』に発表された「小鴨の願望」

千空さんは随筆の中で、戦争中の自分への後悔、その後の苦悩が新たな文学の出発点であると確認し、これからは「人」と存在する人間でありたいと強く願望しています。千空さんはこの願望を成就するために「俳句」を必要としたのです。

昭和二七年からの一五年間は千空さんにとって「水底を見てきた顔の小鴨」の目を見開かせ、俳壇に打ち寄せる荒波に漂流することなく作品作りに全力を注いだ時代だったと感じます。そして、その成果は五所川原の文芸復興とも言える形で現れていったのです。

五所川原人の流儀

「当地の俳人は長くまとまらなかったが、われわれの会は、ぱふらっと始まり、ぱふらっと続いている」という千空さんのユニークな表現にあるように、五所川原俳句会の始まりは結社というような組織だったものではありませんでした。その実態は千空さんのエッセイからも窺うことができます。

五所川原俳句会は、津軽詩話会に拠っていた人々を中心に、結社を超えた自由な句会として生まれました。青森俳句会流ですが、もっと自由な句会で、会誌もなく、句会だけが中心の、互選互評オンリーの、火花散らし、文台引きおろせば即ち反故というおもむきがありました。酒の強い連中ばかりで、句会に酒が出て議論が白熱し、個性がそれぞれむき出しになりました。北津軽の荒っぽさがむしろおもしろく、俳人としてどのように成長するか、私はみつめていました。会誌は出さないが、個人句集は積み重ねてゆく方針で、句集が出せる段階まで句作を続

けてゆくしかない、しぶとい句会となって、発足以来五十年、今も続いています。『俳句は飲むの文学』成田千空 平成二一年〕

千空さんは句会が開かれると、その日のうちに句稿整理をしました。日時、場所、参加者、そして高得点の順に並べられた作品と作者。これらの得点を月ごと、半年ごとに集計して個々の精進ぶりを示すのです。一文字一文字綴りながら仲間の生活と作品を反芻する作業は、後に個々の句集を編集する懇ろな仕事につながったと想像できます。

昭和三五年から五年間の句会稿が一綴りとなつて残されていますが、変色した紙束からは当時の句会の雰囲気伝わってくるようです。句稿をめくると、十人前後の常連メンバーに加えて飛び入りも珍しくなく、津軽鉄道や東北電力などの職場句会、深浦、嘉瀬、板柳など地道で堅実な活動を長く続けてきた地域の句会のリーダー、また地元短歌会や川柳のメンバーなどが賑やかに座を囲んでいたことがわかります。郊外への吟行には吹田孤蓬ら青森俳句会の仲間の名も見えます。俳人・成田千空の名は県内の俳壇で知られており、五所川原へ転勤してくる俳人は千空さんのもとを訪れました。会員の結婚、転出、新宅、入院、快気、逝去……嬉しいことも辛いことも俳句に詠み、互選し、力の入った選評のあとは酒宴もありの人間味溢れる句会であったといえます。

さまざまな職歴、俳歴を持つ人々を受け入れる許容の広さは新興の商都・五所川原の風土ともいえます。句会の会場は公民館のほか、会員の自宅や職場など、皆で融通しあって確保しました。またそれが可能な時代でもありました。そのうちに

月一度の例会では物足りないメンバーが週一回の研究句会である「金曜句会」も始めました。数人でも都合がつくと小さな句会を開いていた資料も残されています。作品が次々とできて、次の句会まで待てなくなると、一〇〇句単位で新町の暖鳥文庫に持ち込んでくる会員もいました。千空さんはいつでも細かい批評はせずに良い句には丸を付けて渡していたようです。中には『暖鳥』や『萬緑』に投句を始めて頭角を現す者も出てきて、ますます句会に熱が入っていききました。愛すべき津軽人を評した千空さんの言葉をお借りすれば、「一つの事にバカになって」「常識や趣味の範囲を超えて」生み出される津軽人の俳句を千空さんは心底大切にしたのです。

地域文化の発展へ

調査を進めるうちに明らかにになったのは、「五所川原の文化活動を支援する」ことにつながった千空さんの存在です。二度の大火と戦後処理により、豪商や旧家が支えた町の構造は失われたものの、進取の気性を持つ五所川原人と移住者が持ち込む文化が一つになって、活気あふれる町から新しい文化が起りました。「文化不毛の地」などと言われたこの地域ですが、古くからの文芸愛好者も潜在していました。俳句に対する高い志を持ち、中央をも志向する千空さんの存在によって句会としての新しい方向が自然に定まり、五所川原俳句会がこの地域における現代俳句の拠点となっていた、といえるでしょう。

また、三十七年から五所川原市と市文化振興会議の共催で市総合文化祭を開催し、陸奥新報社とタイアップして県下俳句大会を実現させたことをみ

ても、千空さんが地域文化の向上を担うリーダーとして意欲的に行動した人であったことがわかります。市長の佐々木榮造、文化振興会議の増田木亘子、陸奥新報社の船水清、いずれも文芸活動を通じて千空さんと信頼関係にある人々でした。

成田千空が主導した五所川原俳句会は純粹な意味での俳句づくりの集まりであった。得点を競い合うといった遊戯性を切り捨てて、おのが個性に合う句づくりを目指した。そこで千空が果たしたまとめ役としての足跡はことのほか大きい。（『第一回文芸協会賞受賞に寄せての小論』新谷ひろし『文芸あもり』109号）

このようにして積み重ねられた一五年間に、活動の成果としての個人句集が編まれ、千空さん渾身の序文が添えられました。個々の俳人の足取りを読むと、一人ひとりが「りんと存在する人間」であり「人間の存在を如実に示し得る作品」を示して出版に至ったことがよくわかります。奈良北州・奥田雨夕・菊池鮎太合同句集『もがり笛』（昭和三五年）、『平山五朗句集』（三六年）、『対島鳴月句集』（四五年）、前田水馬『旅艸』（四六年）、増田木亘子『幼名』（四七年）、寺山常三『暦日』（四九年）、成田千空『地霊』（五一年）、敦賀晴川『風唱』（五三年）、三上北人『光点』（五五年）、その後も千空さんが関わる句集は数多く出版されていきました。ここに、一個人では成し得ない文化の集積を見ると共に「俳句」といふちつばけなものかどうか、などと自他共に軽視しない方がいい」と誓った日から志を揺るがせずに俳句に打ち込んできた千空さんの覚悟を見ることができ

ます。

〈新刊紹介〉

櫻庭利弘

『デモシカ先生回想記』〈巻〉

先生でもやるか、腰かけのつもりが四十二年。

じだらく生活、勤評処分、結婚……。とにかくおもしろい絵かき教師の自伝。『千空研究』第1号掲載の「千空さんと初めて会った頃の私」も収められています。



定価1500円＋税
青森文芸出版発行

の俳句活動が次のように報告されています。

五所川原俳句会は、成田千空を中心にしてがちりスクラムを組んで寸時を惜しんで吟行に句会にと意欲溢るる活動をしていてすばらしい作品を発表し俳句大会では上位を独占している。増田木亘子を会長とする五所川原文化振興会議が発足して以来、五所川原市の文化活動はめざましく、俳句会、短歌会が一体となってその活動の主流をなし、多くの新人を出し、まさに五所川原市は俳壇の豊穡の地にならんとしている。その因をさぐれば、やはり千空俳句の魅力にあるのではなからうか。

さて、五所川原俳句会の隆盛は千空さんの存在を抜きにしては語れません。この純粹な俳句仲間集いに千空さん自身も支えられていたのではないかと思います。「ただひたすら俳句を作る」場所として五所川原俳句会と仲間の存在があることは幸いであつたのです。

『萬緑』の空白時代

青森俳句会の『暖鳥』と中村草田男主宰の『萬緑』は、どちらも千空俳句に欠かせない存在です。『暖鳥』は実作と評論ともに盛んで、優れた若手

【作品鑑賞を読む】⑨

暮れがたく暮れゆく野づら桜桃忌

〔俳句研究〕8月号、「津軽」より

作者にとって、同郷の太宰治はどこか慕わしい人なのかもしれない。

その忌日は美しく名づけられて、太宰にあげられる人もさほどではない人も、この「桜桃忌」を句にしてきた。この美しい呼び名にひかれて、おおむねは細やかな情の句である。しかし、この句は、そういう繊細な叙情の系譜にあるものではない。朴訥な風土への愛着を込めてつくられているのである。

「暮れがたく暮れゆく野づら」は、いかにも津軽平野らしい眺望である。いや、その眺望をもののみごとに写しとった表現である。その眺望は、たんなる風景ではなく、そこに点在して労苦を重ねる人々の暮らしのことも含まれていよう。「暮れがたく暮れゆく」という人懐かしさ、「野づら」という粗野。いつまでも心にのこる。

そういう風土を共有したという慕わしさが、この「桜桃忌」から感じとれる。（友岡子郷）

『俳句研究』『俳句時評』1998年10月号

の作家も多く育てた県内有数の俳誌です。千空さんは同人として作品や評論を発表し、二八年から暖鳥集の選者になると厳しくも意欲的な句評で会員の指導にあたりました。一方『萬緑』では二八年に第一回萬緑賞を受賞し、師とする中村草田男に作品を問いつけ、全国の萬緑会員の注目するところとなりました。

千空さんの萬緑賞受賞を機に、青森からは『萬緑』への投句者が続々と増えていきました。また、それまで活動が停滞していた県内の地域にも中央を意識した動きが現れ、県俳壇の活性化へとつながっていきました。三三年に青森で開催された萬緑全国大会では「俳句のメッカは愛媛の松山から青森へ移りつつある」と司会の北野民夫に言わしめるほどの盛り上がりを見せました。三四年、この高まりが青森県俳句懇話会へと結実します。また、これらが機運となって青森県文化振興会議が発足し、県内のあらゆる芸術と文化の発展に向けて記念すべき年になりました。津軽と県南の俳人らが合同で作品集を出すなど、これまでにない横断的な動きが出てきました。この頃が県俳壇黄金期と呼ばれるゆえんです。

さて、全国的な俳句のブームが続いた昭和三〇年代中頃から「俳句の社会性」「前衛俳句と伝統俳句」などが取り上げられ、中央の俳壇を揺るがす論争にまで発展しました。『萬緑』では主宰者・草田男が渦中の人となり、地方で静観していた千空さんの去就が批判にさらされる事態も起こりました。俳壇ジャーナリズムの台頭は俳句ブームを後押ししましたが、一方で、全国誌での評価を目標にするかのような風潮が懸念されました。ようやく形が見えてきた県俳壇の結束や個々人の

集積を誰がどのように評価するのか。自分は何のために、どのような俳句を目指しているのか。「俳壇意識過剰になったらおしまい。ぼくは当分啞になって作品を書きたい」（森の会・村上しゅら宛の手紙）。千空さんは『萬緑』への投句を中断する一方で、県内各地の大会では優れた成績を残し、実作と数々の評論で存在感を示しました。俳壇の行方を大局的に見ながら、信念を持って俳句を追求していた千空さんの姿に追いつくかのよう

五所川原往時

千空さんが五七年間を過ごすことになった五所川原の街は時代とともに様変わりしてきました。「私にとってもっとも濃厚な俳句仲間」という結成以来のメンバーたちと過ごした頃の五所川原の街は現在から想像することもできないほどの賑わいでした。当時を知る方々への取材で得た貴重なお話は、当時の街そのものに「人と人との濃厚なつながり」が存在したことを裏付けます。その中で千空さんと俳句会の物語も育まれたともいえ

ます。同じ時代に生きて、哀歓を共にし、しかも俳句というささやかな文芸に、生の証しをとどめようとした同志なのでした。『俳句は歓びの文学』千空さんの人間願望は成就したのでしょ

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

成田千空資料再録 ⑩

師・中村草田男の千空句評③

『萬緑』昭和25年1月号「作品欄批評」から抜粋

汗が眉間通りぬなにがな口惜し 成田千空

「なにがな」は、本来は「何かを……どうかした」とは……思ふが」の意味の言葉である。「お別れとあれば、何かな贈りたいと思ふけれど」のやうな用法である。しかし、此句では「何かが」よりはもつと、いりこんだ、もつと強い、つまり「何が何だか解らないが、何となく……」といふ氣持を出すために、此言葉の語呂を利用したのである。「汗が眉間を通つたくらゐが、何でそんなに残念なのか」などといふ攻撃は、機械的過ぎる。「男の眉間をよくも割つたな」といふ眉間である。空（幹）竹割りにされる時の受難場所である。催眠術師が、意のまゝに他人の意志を奪つて翻弄しようとするときには、自分の指先を相手の兩眼の間へ突出して、老獪にしづしづと上下さす（させる）——つまり眉間の前を上下さす（させる）のである。汗が、——我身から不甲斐なくも發して、否、我身に（？）謀反して、我身の上の、しかも斯る場所であるところの眉間を思ひのまゝに流れ下つた時、世間に對して誇高く、しかも、世間に對して鬱屈してゐる人は「なにがな口惜し」の感を反射的に味はせられるのである。「口惜し」は字足

らずであるが「口惜し」と訓ませるのではなからう。「くちをし」では、餘裕がありすぎて、自嘲の趣味に墮（お）する。

此作者の句は、あきらかに力を盛りかへしてき

た。

『萬緑』昭和25年2月号「作品欄批評」から抜粋

身の始末つげんとごとく馬櫓駈け出す

成田千空

此人も依然好調である。「つげんとごとく」は、やゝ整はない表現のやうに一應思われるかもしれない。この部分だけで角だゝず滑かな表現にするのならば、「つげんがごとく」などとすることも考へられる。しかし「つげんとごとく」は、言ふまでも無く「つげんと駈け出す如く」の省略であつて、その意味で無難であるばかりでなく「つげんがごとく」の滑らかさでは、突然に「身も世もあらず」といつたやうに、激しく揺れて馬櫓の駈け出す氣息は活きない。前後たゞ茫然たる雪の平面。此馬櫓一つの姿と其方向と速度とがあるばかりである——の氣息も直接に受取れるし「トロイ力は露支亞（露西亜）の運命の象徴」などといふ言葉もどこからか想ひ浮んでくる。

『萬緑』昭和26年11月号「作品欄批評」から抜粋

成田千空氏。

妻の眉目春の竈は火を得たり

此夏、千空氏、爽郎氏等に青森へ招いてもらつたが、その折、はじめて新智識として、千空氏が新妻を得てゐられることを知つたのである。蛇笏

氏の「竈火赫とたゞ秋風の妻を見る」とは又相違した、若々しさの躍るやうなリズムをこゝに見る。しかも、躍るやうな調子の中にも、従来の「所詮 business (business) 薪雜棒を割りとばす」式の輕快さとは違つた、実生活の安定からくる根深さが伴つてきてゐるやうである。

『萬緑』昭和26年12月号「作品欄批評」から抜粋

成田千空氏。

「龍飛岬」といふのは本州の最北端、北海道に面した青森県の荒涼とした岬であるのらしい。この作者は単身そこへ出向いて、磯伝ひに辿り辿つて群作をものしたさうである。群作は、総体として味（味はふ）べきものであらうが、個々の作品は又確乎と独立性を保持して居なければならぬこと勿論である。私も此種の群作をものした経験を幾回か持つてゐるので、知悉してゐるが、次々と新しい事象に應接するため激しい興奮がつゞく、その結果、各句が、うつかりすると説明要素を欠除してしまひ勝ちになるものである。現に、この群作に於ても、第二句「かはほりやたしかに咳がきこえたる」は、この一聯中の位置から取出してしまふと、たゞの町中の夏の夕暮に化してしまふ。少くとも、「かはほりや岩間たしかに咳きこえぬ」「かはほりやたしか岩間に咳きこえぬ」とでもしなければならぬのである。第三句「岩藻搔く人の白刃や路尽きたり」も、季感といふ点からは不備がある。

たんぼゝの絮なき萼砲座幾座

この句の前書は、印刷に廻すときの私の不注意で落ちてしまつたが、「旧津軽要塞」とあつたの

である。この句、情景を尽してゐる。荒涼とした吹きさらし。「蒲公英の座」といふ名だけ物々しく、はかない草が、蔓の上に、はかない穂絮さへ既に跡方もなく失ひ尽してゐる有様は、なげきの相其物である。「砲幾座(砲座幾座)」の重々しいリズムの打重ねも対象其物の姿の描写に役立つてゐるだけでなく、前者と同様、なげきの相其物を打出してゐる。斯くこの作者の活動を眺めるにつけて、実生活上の障碍をのり越えて、飯塚風像氏が再び華々しく作品活動を開始するの^マ日が待たれる。

『萬緑』昭和38年3月号「作品欄批評」から抜粋

何の分別掛稲忙裡口あけて 成田千空

「掛稲忙裡」は、この四字を一聯のものとするれば、かなり不熟であるが、「掛稲」と「忙裡」とに二分すれば難はない。此作者の言葉のアッセンには、以前にも指摘したことがあるかもしれないが、しばしば可成りに「やつつけ」に近い操作が見られたが、大抵の場合根本の氣息が張つてゐて慣習上の或ひは論理上の無理を押し切つてしまつてゐる慨があつた。この句——他人の姿を点景的に客観したのでなくてふと、己自身の姿を客観化した瞬間の一種のカリカチュアではないかと思ふ。私自身、昨年転宅其他の一家を挙げての忙裡に、ふとこれに似た己の姿を客観化するの経験を持つたものである。決して、己だけ他の一同との共同動作から身をさけて怠けてゐるといふのではない。その群に混つて一応勤勉に働いてゐるのである。しかも、ひしひしと己だけを重なり襲つて来、しかも容易には所置どころか真態把握さへできない様々の問題に脳裏を占められてゐるものだから、

気づいてみれば、いつしか手足をとめて、意味のない一所に佇立して、おそらくは「分別のつかない分別」の表情をしてゐたに相違ない己自身を発見したことであつた。

藁塚幾重厠に気張る声すなり 成田千空

まさに農村である。この句などから感得できるやうな、ありのまゝのすこやかな地上の生活から発する「動物の氣」の活力と安泰さとが私は好きだ。農家の家裏、刈田に面した外厠、おだやかな日の光の色に満ちた円かな形の新藁の塚にかこまれて、戸一枚の内側からは健かな排便の声がしてゐる。それは「収穫の安堵の声」そのものだ。こんな句などを見ると、私は真から永生きがしたいといふ慾望をおこすのだ。私は、俳壇に於てときどき目につく、作品に具体性と肉体性との強みを帯びさすつもりで、「ふぐり」「まり」などの語を無思慮に頻用する傾向を愚かだと断ずるものであるが、この句に於ては「惡趣味」の影がない。何よりも真の意味での品位がおかされてゐない。私はよく無駄話をする男であるが、連想が次の二つのことを語らす。戦時中秩父町の郊外の農家に家族を一時疎開させてゐたことがあるが、その附近に実に好ましい外厠が一つあつた。それは、前面が展けて日の光のあふれる場所、楠の大樹の下にあつた。山から切つてきたまゝの自然木を皮つきのまゝ、四方柱にしたので、全体がユーモラスに——この千空氏の句の言葉をそのまゝに遣へば——身をゆがめて、気持よささうに「気張つて」ゐた。黄を帯びた赤土の荒壁が風雪にさらされていゝ色をしてゐた。この歪んだ建物に、しかも隙間が生じないやうにピッタリ閉められるやうに細工した

一枚戸がはまつてゐた。「祠のやうだ。おんな厠が一生に一度は欲しい。」といつて、戦時中に何を呑気なことをといふ意味に加へて、二重に家内に笑はれたものである。もう一つの思ひ出した話は——高野素十氏から出たものである。彼氏が独逸へ留学中、下宿の主婦の老婆が排便中の声をきゝつけたといふのである。彼女は唸りながら、「オ、ゴット。オ、ゴット」(お、神よ。お、神よ)と言ひつゞけて居たとかいふことである。この句の主人公は、この平安な孤独の場にあつて、「あゝ、南無あみだぶつ。あゝなむあみだぶつ。」とつぶやいてゐたかもしれない。あらぬ方へ話が走り過ぎた。新春の一興とでも免じて貰ひたいものである。(完)

寺山修司を詠んだ千空句

夏百花朱を噴くをもて瞑すべし	(県句集20)
わが恋ふる少年修司薔薇の香	(県年鑑1985)
疾走の飛沫のつばさ修司の忌	(天門)
沖青き厠の小窓修司の忌	(萬緑57・8)
鮮緑の中の暗緑修司館	(文芸あおもり151)
生前も死後もなくて修司の忌	()
ゆく春の道化の泪修司館	()
親はなく子もなき天地修司の忌	()
木に宿る滴もみどり修司の忌	(萬緑59・7)
修司忌や風切あらき鴉ども	(十方吟)

寺山修司と成田千空

青森高校時代の修司は俳句に熱中し、『暖鳥』
選者だった千空はその才能に注目した。

『暖鳥』第65号 昭和27年9月30日より抄出

自己形成へ ― 縣下高校生俳句大會について

寺山修司

「ありきたりの大人の句会の真似だけはするな」と大会以前に千空さんからハガキをいたゞいたのであるし、夏の大会も好評であつたのでこの秋の高校生俳句大会はうんと清新な計画でやるつもりでいた。

しかし文化祭になつてみるとやはり文学展や文芸コンクールなどの行事ができて、にわかに多忙となり結局句会の方は夏の二番煎じとなつてしまつたので千空さんのハガキにはまことに申し訳がないと思つている。

しかし事実上の収かくは少なからぬものがあつたし参加者も一応、夏を上回ることができたのであるから、その意義も認めてもいいだろうと思つている。

黒高とも友好が増し、この次にやる大会は黒石にするか、などの話もあつたし、また前回のプリントを配布してくれるなど何か高校生俳句の前途に明るいものを感じさせた。

場所は青高の図書室――。人員は二十七名で内訳は女が五名のこりは男であつた。

「かたくり」からは女子二名が来ただけで一寸さみしかつたがその他は一応顔がそろひ、あのあたりが県の高校俳壇の全貌ではなからうかと思うと俳句の普及程度の低さが痛切に感じられる。

句にはさすがに花鳥諷詠がなく、その反面、やたらに

「孤児」や「びっこ」が多かった。

これは特に山彦会員に見られた現象であつてよく言えば新興俳句の野性への目ざめであり、若さの横暴であるが一考を要することであろう。(以下略)

『暖鳥』第68号 昭和28年1月17日より抄出

一九五三年を迎えて

私はかくありたい

寺山修司

玫瑰やいまも沖には未来あり
愛誦句です。こんな句を作つてみたいと思つて始めました。

ブツセの詩のような、あるいは東洋的なあこがれのこの句を私の手でものにできるのはいつのことでしょうか。来年も再来年も、私は俳句を作らねばならぬようです。私の乏しい青春性を引き出してくれた「万緑」誌上今年には叫べるだけ叫んでみたいと考えております。

暖鳥誌では倅に千空さんが選者になられたとか。この一本のロープの上には今までも乗りたいと考えつゞけていた雲があるような気がします。

更に。三鬼のいわゆる実存哲学へ堀り下げるという句。それらに私は人生觀の手術を受けるような戦りつを感じます。奇術的な言語の使い方の異様な魅力は私をはなしてくれそうにもありません。

この線に沿つてドラマ性(俳句のフィクション)を試作してゆきたいとも考えております。

私はもつと私を知る必要があります。私のどこかに私もしらなかつたしあわせがあるかもしれません。それを求めたいのです。来年は鬼門の受験です。詩と學問は今年も背中あわせになりそう。私がどつちものに出来ないとしたらそこには私だけではない悲劇が起る感じ

がします。

どうやら夢をみるのも一時休業になるかもしれません。
地の涯に倅せありと来しが雪 源二

『暖鳥』第69号 昭和28年2月15日より抄出

感想 ― 二月暖鳥集

成田千空

寺山修司。

寺山君の俳句的生活力には参る。ふところに七つ道具を用意してこれぞと思ふものは手当りに次第に刈りとり身を肥やしてゐる。これは若さの、いや、寺山君の特権といふものだ。僕は苦勞性だから、ときをり、こつそり(あゝ、寺山君、今学期の物理の試験、うまくいつたらうか)と思つたりする。然し、文芸に身を寄せる喜びが作品の底流をなして、何か本質的なテンパラメントを感じさせる。

氷柱風色噂が母に似て来しより

ふと、耳にはさんだ噂話がどうやら母に関するものやうだ。確かではないが次第に母の噂に似て来る。「噂が……似て来しより」といふ時間表現は、遠く離れてゐる母を感じさせ、それだけに一層、安否と思慕がつる。その心の波立ちが氷柱を吹きぬける風の色につながつて、見えないものが見えてくる。しかし、そのつながりを、氷柱が凛々と拒んでゐるのだ。かなしい現実の筈である。しかし、その現実のかなしさが、作品の口調からあまり感ぜられないのは、僕の解釈が間違つてゐるのではなく、その現実を文芸するよる、こびが、かなしみを帖消しにしてゐるのだ。盲点である。(久美君の「爆音下」の句も、その欠陥を持つてゐる)。しかし、先達の方法を、こゝまで消化した消化力は、いつか、その盲点を突き抜けるだらう。雪ごと墾つておのが祈りに遠きこと

実作者の覚書

成田 千空

昨今、「分りにくい」或いは「分らない」という言葉が俳壇に横行している。確かに現代俳句の先端は、他の現代詩や現代絵画と同様、いろいろ面倒な課題に直面しており、簡単には分りにくい作品がそれぞれ産みだされている。その点の究明は、批評家は批評家なりに、作家は作家なりにそれぞれの仕事に於て考えねばならぬが、こゝでは、苟(苟)しくも作品を作る人間が、他の作家の作品について「分りにくい」という言葉を発するとき、その言葉の発し方——態度の問題について考えてみようと思う。例えば「風」の澤木欣一氏が(左様——澤木欣一氏ですらが)、「草田男氏への手紙」の中で、「好きな句」と「分らない句」を挙げて、その「分らない」方の句について、「紙上で簡単に教示下されば幸いです」と云っているのは、どう考えてもお座なりな態度だと思し、又、田川飛旅子氏が「銀河依然」の中の、自分に「分らない句」について、これこれの句は自分にはさっぱり分りませんと云つて、分らないものを正直に分らないと云い得た一種の晴がましさを露呈しているのはどうも作家の心根として物足りない。それで心が済むならまことに簡単な話で、己れの問題を少しも語らないのは態度として誤りだと思ふ。少くとも、中野重治が「茂吉ノート」を書いたとき「——アフリカのブッシュマンのあるものにはへへ」までしか数の觀念がなく、それから先はすべて「澤山」という概念で片づけているという話などを読み、こういう目論見にもとゞめを刺された思い」をしたという内心のゆらぎこそ作家としての正直さを示す語り出しであらう。

ところで、現代俳句の「分りにくさ」或いは「分らないさ」を人々が挙げつらうとき、これらの言葉は何となき、「茂吉ノート」の第三ノート「茂吉にある分りにくいもの」を下敷にしていまいだらうか。例えば楠木(楠木)憲吉氏の「草田男俳句は分か(分)りにくいことに依つて若い人々の魅力になつてゐる」という意味の、肯定とも否定ともつかぬ言ひ方——つまり、御本人はそれではどうか? という疑問を起こさせるような言ひ方は、多分、「茂吉ノート」に於ける重治の、「恋をしてゐる娘の言葉が、言葉として半端でありながら、青年を捕へて放さぬに似た」心情——実は、重治自身の茂吉に対する魅力を語つた言葉を下敷にしているのではない。若しそうなら、こゝでは確かに重治は顔を赤らめて言つてゐることを、憲吉氏は見落としてゐるように思う。そこで、作品を作る人間が、他の作家の作品の「分りにくさ」を言うときの態度の根底というものを、重治の「茂吉ノート」に学びつゝ考えてみたいと思ふ。

嘗つて、「お前はもうトンボの羽を歌うな」という日本的情緒に対する殆んど肉感的な否定に立ち到つた重治が、「腹のたし」になる行動に誘われた「歌のわかれ」は、明かに彼の青春に於ける自己変改であつた。それは「言つてしまえば、嘗つて、茂吉ばりの歌をつくつたり」「わたしの茂吉好きは、例えば、田舎の中学生がオレはゴッホがたまらなく好きだという性質にも似た」惚れ込み方をしたり、思ひ屈して詩作に心を投じたりした彼の生得的な情感——恐らく、トンボの羽ずれにすら情感の波立ちを覚えた彼自身の内部にあるものに對する一種のたゞかいの必要に基づいてゐた。もつと割つて云えば、重治の生得的な情感が、生得的なだけに自分自身の全てを覆いつくすことに依るゆるみの怖れ——それに依つては己れの形成を危ぶむ認識が、新しい自己を掘り起す根に据えられた。更に言えば、そういう変改意識自体が彼の生得

的な人間の一面に關する筈だが、彼はいかなる立言や行動にも決してお座なりな態度を示さないのは、お座なりになるような粗雑な感覺を持ち合はせていなかつたことに依る。ものを作る人間としての大事な下地が輕薄を許さなかつた。それ故、彼の変改のみちゆきは牛のやうにのろろしている筈で、例えば、プラトンが危機に臨む若い国王に数学を奨励した(自然からの解決)、そういかたちで重治は逸早く己れに科学を要請したのは、生得的な己れの情感の流れに杭をぶち込まざるを得ぬ平衡感覺に依つたものと思う。科学的態度という本来非情な世界が、重治の場合、變に人間的情熱つばさに依つて支えられてゐる。この、詩と科学の二つの焦点を持つた人間構造が、本当は、彼の茂吉にひかれてゆく動因であつたらう。変改のみちゆきののろくさは、一度振り捨てた歌を再び「茂吉ノート」に依つて考え直すのである。「——動機は自分の文學觀の訂正、変改ということであつた。私はそれを、日本文學のうちの最も古い傳統をもつ和歌について考えて」みる氣になつた。しかしそれは必ずしも和歌に味方する氣になつたのではなく、歌を切り捨てたことが、そのまゝ、日本的傳統を切り捨てたかたちで己れの人間及び文學觀が形成されてゆく危さの自覺から、再び日本の傳統にもぐり込み、その根を新めて洗つてみるという徹頭徹尾、自分の問題としてゐた。つまり、今度はあくまでも歌の中に踏みとゞまり、己れの「歌のわかれ」的部分を愈々判つきりさせることに依つて変改された歌——傳統を自分のものとして確めるその目安に茂吉を置いたのであつた。「運転中は運転手に話しかけないで下さい」という玉川電車の懸札を思ひ出しながら考えをすゝめたのは、多分、「素人のかなしさ」がそうさせたというばかりでなく、自分の「茂吉ノート」は自分自身の變改のみちゆきとしてのそれだという自覺に依るのであらう。

『文芸あおもり』第141号 平成6年7月31日より抄出

千空対談 第4回

京武 久美 — 寺山修司の俳句 —

千空の萬緑賞が刺激に

千空 彼が影響を受けたのは、俳句では中村草田男、西東三鬼ですね。

京武 それから橋本多佳子ですね。

千空 多佳子は叙情ですね。

京武 質が似ていると思いますよ。

千空 去年「萬緑」の忘年会で「寺山修司と草田男について」短い講話をしたんですがね。その時喋ったのは「修司は少年時代からロマネスクという一つの理念を持って俳句を出発した。なぜそういうことをやったのか」と言う、草田男と無関係ではないだろう」と。

京武 草田男は言葉が豊穡ですね。その点にも寺山が惚れている、かすめ取ることが出来るわけです。チエホフ忌という言葉自体普通の雑誌には載っていない言葉なんです。

千空 言葉の狩人としての狩り場だね、草田男は。草田男の未完成な部分までとらえて、寺山はそれを完成させていますよ。

京武 だから大したもんだと思いますよね。

千空 昭和二八年に私が萬緑賞を貰った時、ショックを受けましたか。

京武 寺山は大ショック。青森県にもこういう人がいるのかってね。それを超えないと駄目だということですからね。

千空 それはずっと超えていますから。受賞した時、

などとみづから稱していた。その気持をどう解して呉れたらどうかというのと同じである。今の歌人にちつとも共鳴が無いと思われたことは、それは一般の読者によく分らぬものと茂吉自身にも思はれたこと、つまり、茂吉の口ごもりは恐らく彼の衆人意識による反射としての自己へのめぐり込みだと重治は見当をつけ、彼の散文のある部分にもそれを実証している。結局これは、茂吉の分かりにくさを、歌の意味及び感動の性質が分かり兼ねるという単純な疑問だけを傍観的に云っているのではなく、あくまでも自分の問題に引きつけて、生き方の問題として云っているものであった。「茂吉ノート」の力は実は徹底的に茂吉を究めることが重治自身を究めることにつながる、胆の据え方から来ている。

去年、堀辰雄が死んだとき、その追悼座談で重治が「驢馬」の頃に觸れて語った言葉を思い出す。

中野重治「僕は思い屈して来るとどつかへ遊びにゆくが——電車賃だけを工面して堀のところへゆくわけだ。行つてどうにもならないけれどね。そういうこともあつたなア」

中島健蔵「そういうえば、そういう訪問つてのはころあるかなア。思い屈してどつかへ行こうなんてのは」

自分自身に関する問題に思ひ屈してどつかへ行つたつて、どうにもならない事ははじめからわかっている。そうすると、行つた先での自分の言葉は口ごもりの気味があり、重治の詩人的気質をつくづく感じさせる。詩人というものはどうも口ごもりから脱し、切れぬ人種なのかと思う。唯、重治はそういう自分を自虐の方向に流さないので、自己変改という困難な方向へ導き、そのみちゆきの途上で「茂吉ノート」が書かれ、「茂吉にある分かりにくさ」が切実に語られてゆく。その前向きな姿勢に精神の若々しさがある。見上げた態度だと云わねばならぬ。

「茂吉にある分りにくいもの」という第三ノートは、どうしても重治が取り組んで「茂吉は分りにくい詩人ではない。むしろ分かりいゝ詩人とさえいえるのである。それにしても茂吉には分りにくいところがある」しかし、この部分は、それ自身とありながら、やはり全体にかゝわっていることを否めない。——それが明晰な茂吉に一つの翳りを与えている。翳りという言葉はニュアンスという言葉に改めていゝ。それは茂吉の口ごもりにあると重治は見ている。この口ごもりは「茂吉の一つの弱点でありながら一つの魅力になつている」という重治の受けとめ方は、探ぐるべき問題として自分には魅力だという意味だろう。彼はそこで廻りのシヨボシヨボした草を薙ぎ拂ふ。「茂吉の口ごもり、曖昧としか見えぬ作品を、それと気付かず、自分の中に出来ている茂吉像のなかへ組み入れ、呑みこんで分つたような顔をしている歌壇の人々」、歌づくり同志の馴れ合いが醸す曖昧な情趣を薙ぎ払うのは彼の場合筋が通つている。それはしかし何も「分らぬ」ことを「分らぬ」として事を済ますべきだというのではなく、「実も蓋もない結果になつても、取り出して検べる必要があるのではないか、そういう行き方こそ鑑賞と批評に於ける寫生というものだろう」——と云えば簡単だが、この簡単で難しい態度が、鑑賞と批評に於いて現今未だにとられていないのが一般のように思う。これは自分をも一方向的に棚にあげては叶えられぬ事柄である。

重治が茂吉の分りにくい部分は、彼の口ごもり、由来すると云う。——（かの岡に癡癡院のたちたるは邪宗来より悲しかるらむ」という歌を作つたことがある。墓地から青山脳病院を見てそれを詠じたものである。しかし今おもうに余の此の歌を読んで呉れた方々は、どうこの歌を解して呉れたかと、ふと思つたことがあつた。それは私が精神医になつてから十五年も経つて、「狂人守」

『牧羊神』の一座に何かのショックを与えたのかも知れないという予感があったんですよ。それから青森県の俳壇がわつと燃えてきたんですね。

京武 それは言えます、確かに。

千空 寺山は誰の影響とかは絶対言わない。

京武 それは言いません。私だけが楽屋裏を分かっているだけであって。

千空 京武さんが一番怖いと思いますよ。

『現代俳句の世界』俳句研究別冊 平成15年1月10日

巻頭随想 混沌の力

成田 千空

かくれんぼ三つ数へて冬となる 修司

先日、私が担当している青森の俳句教室の受講生たちと、青森県三沢の寺山修司記念館へ吟行した。平成九年に開館した修司館は忽ち全国的に注目されたが、私は今度始めて行つて見たわけである。修司が青森高校生の頃、私は「暖鳥」の選者をやつていて、彼らの投句に注目し、特に修司の句に眼をかけていた関係から、彼を多少知っているつもりである。高校時代、彼は俳句にとりつかれていたといつていい。京武久美と共に十代の俳誌「牧羊神」を出し、全国の高校生俳人に呼びかけて全国高校俳句大会などを主催した。彼は新しい俳句の可能性を希い、そのために当時の主要作家、中村草田男、山口誓子らに直接作品を問い且つ養分を吸収した。

昭和二十七年に加藤楸邨が青森の俳句大会に出席した折、高校生の寺山と京武が楸邨に問いたい句があるから紹介して欲しいと私にいうので、連れて行ったところ、彼らはそれぞれ三十句程、楸邨に示して批評を請い、特に寺山の句がほめられた挙句、「しかし君たち俳句が巧

ますぎるよ」とやられた。寺山の俳句活動は十代の数年で終わったが、うまい俳句がノート十冊ほどに書き残された。その量は並の俳人の十年分くらいであろう。彼は俳句から短歌へ移り、更に詩や演劇や評論等々、表現の世界を新しく広げて行つた。俳句に可能性を求めた彼の原点は、彼の人生表現のベクトルとなったと考えられる。

寺山修司記念館は三沢市淋代平の原野の奥にあり、荒野を愛した彼にふさわしいのだが、行つて見ると、前衛芸術的な意匠を凝らしながら、華やかさと暗さの混交した不思議な空間があつた。彼と高校時代を過ごした女性が幾人かいて、しきりに彼を懐かしがった。彼の存在がここに息づいているからである。だが俳句資料は殆ど隠されている。十代の俳句活動が暗い部分に隠されているのは、十代の終りに俳句絶縁宣言をしたからであろう。戦後、アメリカ軍の基地の三沢で、彼は少年時代の四年間を過ごただけであるが、開拓しなければ食べてゆけない荒野と、アメリカの基地に依存して生きる町が、少年の心に影を落としていた。混沌とした東北のこの町が、彼の心の原型となつたはずである。俳句に絶縁した彼は晩年になつて俳句への復帰を希つた。新たな可能性を希つたはずである。修司館は彼のパイオニア精神を焚きつける施設であつた。

*

私が俳句をはじめてから六十年になるが、多くの忘れがたい句に出会つた。その中から特に挙げるとすれば、

去年今年貫く棒の如きもの	虚子
金剛の露ひとつぶや石の上	茅舎
空は太初の一隅松となりて立つ	草田男
炎天の一隅松となりて立つ	楸邨
雪はしづかにゆたかにはやし屍室	波郷
たましひの繭となるまで吹雪きけり	玄
ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに	澄雄

大寒の一戸もかくれなき故郷 龍太
人体冷えて東北白い花ざかり 兜太
鈴に入る玉こそよけれ春のくれ 敏雄

写実を超えて心象の世界へ突きぬけた、すごい句ばかりといつていい。こういうすぐ味のある句が、当今乏しくなっているように思われる。

私は初期の頃、中村草田男を師として選んだのは、俳句の伝統に即しながら斬新に俳句を把えている作家の仕事で、どうしても学ぶ必要があつたからである。「俳句の味を決まつた物差ではかりとするような客観的な美が別にあるわけではない。どこにも真であるところ、むしろその掴み方、生き生きした本物の体験的な認識、うねつて行く考えそのものに美がある」という。私は草田男から、自由な発想と厳格な表現を学んだ。自由にして厳格な俳句の可能性を、どうやら私は求めてきたようである。その在り方は作者によつて多様であり、師以外に多くの作者から学ぶところがあつた。中でも草田男に対する金子兜太の立ち向い方に、打たれるものがあつた。

兜太は旧制高校時代に、九州の竹下しづの女が提唱した、全国高校俳句連盟誌「成層圏」に参加して俳句をはじめ、その東京句会の指導者が草田男であつたから、師弟関係といつていい。若い感性で草田男をよく学んだ点で、寺山修司などと共通している。兜太は寺山を認めていないが、草田男も兜太も寺山もそれぞれの時代のパイオニアに違いない。のみならずそれぞれ異質の才オスを内在している。今度出版された草田男の講演集『俳句と人生』にこういう言葉がある。「今後の俳句は八つ裂きにされそうな矛盾の道を行かないと、奥深い光をたたえた俳句は生まれない。――遊び事でない俳句を作るのは、非常に困難な道である」。

* 現在では差別用語とされる個所がありますが、作品尊重の立場から原文のまましました。

陸奥野辺地社中

芭蕉二百回忌追善興行

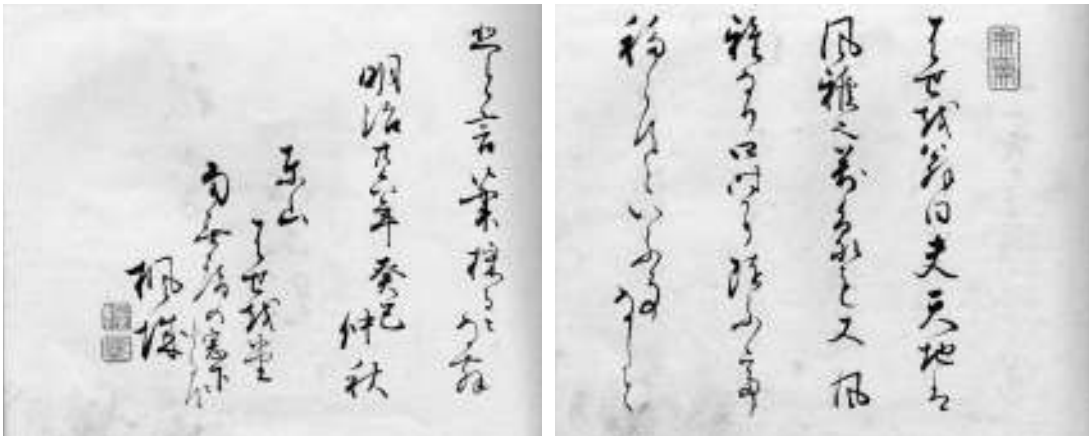
翻刻・解説 舘田 勝弘

はせを翁曰、夫天地は風雅の万象も又風雅なり、四時に随ふて移らずといふ事なし、と。されば誰か云けむ、仏を愛すものは一銭を積て一切蔵経を煮り、詞を愛すものは一言を考えて万象の姿を得るとかや。うべなりけらし。祖翁、世に出給ひし後は、正風の俳諧代々盛にして、おのく言葉を積て正門の法華經になさむとこゝろぞす風士数多なりけり。今年にはせを翁式百回忌の正当なれば、そが流れに遊ぶものは皆追善の法会を営み侍る。陸奥国野辺地の社中誰かれ発句会てふものせられて、追福の余興に備へ侍らなむ、とて批判せよと草稿さしむけられたり。まことに志の篤をめづる余り、拙きをかへり見ず、はじめにひと言筆採るになむ。

明治廿六年癸巳仲秋

東山

はせを堂



序文の最初（右）の最後

南無庵の窓下にしるす

楓城

楓城 (*印2)

秋季拾五題

拙評

はせを堂

芭蕉堂

楓城

(*印2)

拔萃壺百章次第逆列

只通る人もとめて門茶かな

里近く鶉鳴なり栗畑

しら露のものに満らぬ日和哉

漂ふて月出にけり芒原

柿店や並らべし艶のうるはしき

地埃りもたゝぬゆふべや散る柳

手入せぬ薺咲て残暑かな

初秋やまだ冷麦に招く友

こぼれても減り目の見えず萩の花

霧涼し何処へ飛行明鳥

見つめるや月にうらみの有様に

こぼれ日のうすき流や秋の風	尚齋	音高し磯打浪も秋の海	寄舟	入船の見えてもさびし秋の海	同
誰が店の朝灯明や草の露	同	草むらの夜明をさそふうづらかな	歴岱	自他楽に猫の寝て居る残暑かな	松窓
鶉啼片山里や秋淋し	庄山	わび人をもてなし振や茶たて虫	松窓	秋立や峰の松風釜のにゑ	尚齋
まだ蚊帳の釣手に残る暑さかな	東英	世の秋も知らで白なる糸瓜哉	東英	朝かげや露も色ある萩の花	歴岱
はつ秋や池をめぐりて気養ひ	歴岱	暮の雲芒ひと穂に動きけり	尚齋	四十坐（*朱書）	
風鈴の音もしまりけり秋の風	庄山	葉より葉を月をこぼして草の露	松窓	西風に身をまかせたる糸瓜かな	尚齋
釣人の笠のみ見ゆる芒かな	尚齋	松風を先譽て吞門茶かな	尚齋	いさり火は海の花なり浦の秋	東英
松風は波の音なり霧の海	松窓	秋風やうごき初たる峯の雲	歴岱	汀迄山の裾ひく尾花かな	北風
朝蔭の移りてきよし草の露	北風	門川や瀬音に馴て散る柳	同	鳥わたる日和も稀や秋の海	東英
ひとつ家の夕暮遅し花すゝき	庄山	誰がためとむかし問たき門茶かな	尚齋	声先に夜明わたるうづらかな	尚齋
月清みあてなき方へうかれけり	寄舟	足もとにうづら立けり小野の奥	松窓	踏分る深草道や啼うづら	同
柴の戸にけふもふらく糸瓜かな	尚齋	又六が門に見事な糸瓜かな	同	朝露を萩の物よと思ひけり	素光
萩咲や覗て見たき人の庭	歴岱	灯を慕ふ虫まださらぬ残暑かな	尚齋	吹止んでもとの月夜や芒原	東英
しら露の草木にあまる夜明かな	寄舟	畑中に眼立ひと樹や柿の色	寄舟	初秋や一本眼立庭の竹	庄山
柳散るやまだ夏夜さらぬ間に	松窓	虫売の妻子も露の世すぎかな	尚齋	深野出てふるふや萩のぬれ衣	尚齋
遠退ば磯家の低し秋の海	庄山	窓ふさぐ糸瓜にくらし流しもと	寄舟	三十坐（*朱書）	
鋏杖に夕川覗く残暑かな	尚齋	五十坐（*朱書）		厩にはまだ蚊柱の残暑かな	北風
芒野や駒もさながら波の中	松窓	むら雨の干ぬ間に秋の立にけり	松窓	よい程に風も匂ふや月今宵	素光
霧ふかき窓に朝日のこぼれけり	素光	糸瓜よと問るゝ迄の風情かな	歴岱	是も又店の馳走ぞ虫の声	庄山
接待や愛想こぼるゝ松の下	同	わびしきや露散る中の虫の声	寄舟	秋風の障りはじめや管のれん	松窓
あながちに風にもよりて散る柳	東英	小高みに月を吹出す芒かな	松窓	旅人のこゝろなぐさむ門茶哉	寄舟
細道は皆柿の樹の在所かな	庄山	虫啼やこしかた思ふ草まくら	寄舟	露清し世の塵払ふ朝日かげ	北風
霧の香も吸こむ川の流れかな	尚齋	やどる樹を尋る様ぞ原の月	尚齋	はつ秋や草樹に障る風のふく	北風

〈解説〉

陸奥野辺地社中

芭蕉二百回忌追善興行

本書は、成田千空氏旧蔵のものである。平成二十七年七月七日、佐々木達司氏から本書が届き、これに関する調査を托された。

本書の大きさは縦十七cm横二十三・三cmの横長で、横に二つ折りした料紙が五十一枚綴られている。これに表紙、裏表紙が付くが、表紙の題簽に書名はなく、仮に「陸奥野辺地社中芭蕉二百回忌追善興行」としておく。この興行の実施は、明治二十六年仲秋である。本書は、野辺地社中八名の俳句稿を、京都東山の芭蕉堂山鹿楓城が選した筆録本である。

ところで、明治二十六年は芭蕉二百回忌に当たる。芭蕉を祖とする全国の俳諧宗匠は、この忌にあわせ、追善興行を行い、さらに芭蕉句碑や芭蕉廟を建立した。この時、正岡子規は「芭蕉翁の一驚」(『日本』明治26年11月6日)で、東京だけでも

数百人の宗匠がいるが、一人として芭蕉の俳句の本質を理解していない宗匠連で、二百回忌を金儲けの好機と考えていると皮肉っていた。そして、子規は「芭蕉雑談」(『日本』明治26年11月13日〜27年1月22日)で、宗匠らの月並調を批判しながら、芭蕉俳句の再評価を試みていった。子規が行った俳句革新運動の初まりである。

繰り返すが、本書は、「陸奥野辺地社中芭蕉二百回忌追善興行」を京都の山鹿楓城宗匠が巻いたものである。山鹿楓城についてであるが、京都の人で、名は完貞(通称泰三)と言った。堤梅通の門に入り、東山芭蕉堂八代をついで八世庵と号した。明治三十三年、七十二歳で没している。つぎに、野辺地社中の八名中、野坂東英(竹次郎)、角鹿松窓(良右衛門)、山口尚齋(のち鶯子、久太郎)を除いた五名について号以外は不明である。

そのうち、歴代は、「明治二十九年海中寺献額」(『野辺地町史』第二巻)によれば、五戸の人となっている。楓城が選した百句は、北風の「しら萩や世を月花に過す窓」が巻中の逸を最後に終わる。野辺地町の野坂東英を祖先にもつ某家には、山鹿

楓城の筆録本「明治二十六年十二月梅林集納会俳諧之発句集花之部」「明治二十七年十月梅林集月並俳諧之発句集鳥の巻」などが残り、野辺地俳人と楓城との深い結びつきが知られる。作者別の句数は巻末の書き込みが参考となる。

また、本書のほかに、県内では芭蕉二百回忌を記念して刊行された本に、艸々庵句仏編『子規』(艸々庵社 明治25年10月12日刊)がある。これは、弘前市の天満宮に「芭蕉翁」建碑(明治24年10月12日)をした翌年、芭蕉翁二百年祭興行に奉納された発句、詩歌、前句、狂句をまとめて出版されたものである。艸々庵句仏のほかに津軽の宗匠の名が見える。

現在、子規以前の俳句資料は目に触れる機会がほとんどないというのが実情である。千空の蔵書としてあった本書は、芭蕉二百回忌を記録した価値ある本であったわけである。

なお、本書を翻刻するにあたって、編者が勝手に原文にない句読点やルビを付したことを記しておく。

(青森県郷土作家研究会代表理事・会員／弘前市)

寄 贈 感 謝

齋藤光子さん（青森市）『青森ペンクラブ』第9号
「俳句と人生 成田千空氏＋藤木俱子氏」
齋藤美穂さん（五所川原市）『萬緑』昭和28～38年コピー
浅利康衛さん（青森市）『まほろば』3・4・5月号

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。
1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）
2. 回想の成田千空（2000字以内）
締め切り 第11号は7月末、到着順に掲載します。
送り先 （下段発行所、青森文芸出版あて）

* Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-jungei.co.jp

会 員 を 募 集 し て い ま す

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員として登録ください。会費は年1000円です。

千空没後10年記念イベント

日時 5月21日（日）13時30分～15時
場所 青森県近代文学館（入場無料）
内容 ①朗読会&解説員による朗読
「寺山修司と成田千空」

②千空研究会メンバーによるおはなし
* 2月25日（土）～5月24日（水）県俳句懇話会
寄贈資料展が開催され、千空資料も展示されます。
* 千空研究会メンバーの顔合わせの機会でもありますので、お出でをお待ちしています。

会 員 名 簿 （51名）

〈青森市〉浅利康衛、齋藤光子、高森ましら、西谷ともえ、野沢省悟、浜田しげる、未津きみ、吉田州花
〈平内町〉佐藤陽子
〈弘前市〉阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、佐藤繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之
〈藤崎町〉清水雪江、世良啓
〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次
〈十和田市〉日野口晃、米田省三
〈五所川原市〉荒閑映子、一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉木村武彦
〈中泊町〉外崎文夫
〈つがる市〉兼平一子
〈深浦町〉草野力丸、山本こう女
〈岩手県盛岡市〉瀬川君雄
〈茨城県那珂市〉矢須恵由
〈千葉県流山市〉藤埜まさ志

計 報

成田奉生さんが3月2日逝去されました。

2017年会費領収しました（9号掲載を除く42名）

浅利康衛、阿保子星、荒閑映子、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、一戸鈴、葛西幸子、兼平一子、鎌田義正、上條勝芳、木津谷絹子、木村武彦、草野力丸、櫛引麗子、小林凡石、齋藤光子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、清水雪江、世良啓、高橋睦子、館田勝弘、土田紫翠、外崎文夫、奈良知治、成田圭子、成田奉生、仁科源一、野沢省悟、野村正彦、浜田和幸、藤田健次、米田省三、松宮梗子、三上弘之、未津きみ、山内ひろ子、山本こう女、吉田州花

2018年会費領収しました 葛西幸子

☆ 北 極 星 ☆

○「天声人語」に千空句が引用され、川柳句会では「千空さんの背広」が席題になるなど、10年経っても千空さんは忘れられてはいない。

○「寺山修司と成田千空」2人の関係を示す資料をまとめてみた。俳句に熱中する高校生の修司と『暖鳥』選者だった千空さん、それぞれの自意識がおもしろい。

「寺山修司を詠んだ千空句」と併せてお読み頂きたい。
○館田勝弘さんを煩わし、千空資料にあった「陸奥野辺地社中芭蕉翁二百回忌追善興行（仮題）」の翻刻と解説を掲載した。子規以前の俳句資料として貴重なものだというのが、千空資料にあった経緯は分からない。

○そんなわけで今号は20ページに増ページした。小さな会報だが並べてみると、千空という対象にいろんな角度から迫っていてもいい。と思うのは編集子の自己満足か。

○このページの上段にお知らせが掲載されている「没後10年、千空を語る」には、ぜひお出でいただきたい。毎号研究成果を発表している西谷ともえさん、齋藤美穂さんのおはなしのほか、県近代文学館解説員による朗読会&解説「寺山修司と成田千空」がある。

2018年5月17日発行
会報『千空研究』第10号

非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-35-5323
FAX 0173-35-8414